

いま「協同」を問う'96全国集会

生命・労働・地域の再生 21世紀の協同へ——東北からの発信

つながりを感じて

安部 優 佑 (宮城県/ウィットネス・フォア)

世の中は、実に多くのつながりや縁で溢れているのではないのでしょうか。

「いま協同を問う'96全国集会」の実行委員スタッフとして関わるまでのプロセスも、やはり偶然ではないつながりがあるような…。そんな気がしてならないのです。

いきなりニューコミュニティ体験！

ちょうど1年5ヵ月前、栃木県宇都宮から仙台にやってきたばかりの頃知り合ったのが、それぞれの分野でのネットワークーたち3人でした。この3人と集う機会に恵まれた時、「経済性、社会性、精神性のいずれも人間にとって大切なものなのに、どうも片寄りがちになってしまっているんじゃないか」「これらがバランスよく循環したり自然に統合されるような提案とは何だろう」という話になったのです。そして、私たちが、「講演会の開催から市民活動の支援まで、幅広い活動を通して、個人の気づきや社会的なつながりを確認していくような「場」の提供とネットワークのコーディネートをやっというこになり、即「ウィットネス・フォア」というグループを立ち上げてしまったのです。

最初の企画は、仙台国際センターでの1000人規模の講演会でした。4人で1000人の動員なんて至難の技です。そこで、主催（企画に赤字がでた時の責任をとる者）はウィットネス・フォアとし、「助っ人」としての実行委員を公募したのです。

公募で集まったのは30人。——と言っても、各々の参加できる状況も意識もそれぞれですから、みんなと一緒に足並み揃えてやっていくのは無理があります。ですが、最初から「助っ人」と位置付けたことで、活動にしばられることなく、参加の程度も自分でコントロールしてもらえたようでした。自由の中で、全体を考え、協力し調整しながら、いかにボランタリーに関わっていけるか…その動きをコーディネートするのがウィットネス・フォアの役割でした。講演会だけが目的なのではありません。従来の「なにせ、主催者がすべてを取り決め、みんなに指示をだしていく」ようなやり方とは違う、「スタッフ一人一人が主体的に関われる全員参加型の場や関係のとり方」が可能な場づくりを、いわばニュー・コミュニティ体験をしようというわけですから。それには、どんなコーディネートが必要なのか…右往左往しながら学んだことは多かったです！何度も挫折感を味わいながらも、自分を振り返る「手がかり」になったのです。

細かい動きは、広報、制作、会場と3つの係に分担して係ごとに「どんなことを、どんなふうどんな条件で」やれるのかを話し合い、決めていたり、通信をだして各係の進行状況のすり合わせをしたり、定期的に全体会を開いたり——といういろいろやりました。私個人としても、広報係として、名義後援のとりつけやチラシの入れ込み、マスコミとの交渉など、新しい体験をして、「専門

外のことでも、以外とやれるじゃないか」という自信をつけることができました。なにせ、仙台に来て4ヵ月程の時。右も左もわからない仙台で、一体、どうなることだろうと密かに思っていたのですから。

何より、みんなと「できること、やりたいこと」を出し合って、「情報をパソコン通信にのせとくよ」「チラシを市民センターにおいてくる」「一人じゃ、交渉に行けないから、誰か一緒に行こうよ」と、まるで、でこぼこを埋め合うような、お互いの事情や条件を加味しながらの動きは「一人の力は小さくても、協同していくことで大きな力になる」ことを実感させてくれたのです。

高度成長時代を過ごし、能力主義といわれる会社で働き、「できること」がいいことという価値観のもとで、「弱さ」をさらせず、「強く」生きなければと頑張っていた時代。それは、支え合うことも、協力し合うこともどこかで拒否し、孤立化から不安を生んだ時代とも言えるでしょう。そんな中、協同は「他人との関係を通して、コミュニケーションや自分を見つめる目」「精神性」を養い、人を育てる場となりえるのかもしれない。

センター・プロジェクトへの展開

今年2月、ウィットネス・フォアが呼びかけ人となって、市民や市民活動のゆるやかなつながりの場、立場や分野を越えて21世紀の新しいコミュニティについて自由に語り合う場を――と、センター・プロジェクトが発足しました。今まで、小グループごとにテーマについて全員が語り合うワークショップを2回行っています。

このプロジェクトは主傍者や代表者はおかず、参加者を限定したり、固定したりもせず、出も、入りも自由。それぞれの参加者が自分達の市民活動をベースにしながら、ワン・プロジェクト単位でくっついたり、離れたりする「アメーバ」のような集いです。そこで、活動を通じて発生した問題意識からプロジェクトを提案し、提案に賛同できる人がプロジェクトを支えることを通して、市

民活動のネットワーク（顔見知り関係）をつくるというしくみ。

宮城では、市民活動が活発で、団体数も多いのですが、現実の活動基盤は弱く、活動の場や資金、人材、情報の不足など問題を抱えているのが実情です。だからこそ、立場や活動分野を越えて、課題や情報をだしあい、語り合い、支え合う「つながり」が必要になってくると考えます。

こうして、市民活動やNPO（個人的に「仙台NPO研究会にも所属」等）に関わるようになっていくと、驚くほどの偶然の一致がおきてきたり、それが重なって一つの流れになったりすることが多くなってきました。

その流れによるつながりは、新たに、「公共性」「起業」というキイ・ワードをもたらしてくれたのでした。

そして、労働者協同組合との出会いが

この流れの中、自分のキイ・ワードや感じとってきたことが、やけに全国集会の趣旨につながる気がして、迷わず、実行委員会スタッフとして参加させていただきました。

昔、街のお店屋さん、物を売るという以外にいろいろな役割があったように思います。情報の交差点だったり、井戸端会議の場だったり――。

（精神性と経済性、社会性が循環する場だったのかもしれない。）

こうした、競争の時代と共になくなりかけているものを取り戻し、再生していく動きや、「社会性公共性」をもつ「協同での地域おこし、仕事おこし」に、「新しいコミュニティ」をつくり出す可能性を感じています。

この集会をきっかけに、また新たなつながりが本当の豊かさを求める動きとなって、集会終了後も広がっていくようだと思えます。それには、一つ一つの準備のプロセスを大切に、取り組んでいくしかありませんね。とにかく、精一杯やってみます！